

規範と理想

スピノザの哲学における「完全性」の意味

柴田健志

この論文は西日本哲学会第60回大会(二〇〇九年、九州大学)での口頭発表に加筆および修正を施し、注を付したものである。発表時の題目は「規範と理想―スピノザの反人間主義―」である。口頭発表にもとづくという経緯を考慮して文体は口語調で統一した。

はじめに

倫理学は「いかに生きるべきか」という問いかけに答えることを目的としています。例えば、アリストテレスは『ニコマコス倫理学』を「最高善」(1094a)の探求から始めています。「最高善」という生の究極目標を設定することによって、現実の生はこの目標を実現する過程として意味づけられます。「いかに生きるべきか」という問いかけに対する答えはここから出てきます。ムーアが『プリンキピア・エチカ』のなかで倫理学を「何が善であるかについての一般的探求」(Moore 1996:54)であると定義したのも同じ理由からです

でも、この話には何か疑問を感じないでしょうか。「最高善」など本

当に存在するのかという疑問はさておき、いったい誰が「いかに生きるべきか」と問いかけているのでしょうか。ようするに、この問いかけの主語は何なのでしょう。もちろん現実に生きている個々の存在ですね。しかし、この問いかけに対する倫理学の答えはいつも「人間は・・・すべきである」というものです。つまり、倫理学が語るのは「人間」が「いかに生きるべきか」についてです。アリストテレスからムーアまでこの点是不変です。だからすごく自然なことのように見えますが、じつはここが疑問を感じる場所です。「いかに生きるべきか」と問いかけているのは現実に生きている個々の存在なのに、答えは「人間」という抽象的なものを主語にしているわけですから。

この問いかけの主語を「現実に生きている個々の存在」といいましたが、むしろ「私」といったほうが適切なのではないかという意見がありうると思います。それについてひとこと断っておく必要があります。たしかに、「私」といったほうが具体性はあるかもしれませんが。しかし、スピノザの哲学について語るとき、「私」という言葉をあまり安易に使用すると議論が不正確になってしまいます。少なくともスピノザ自身は「私」という言葉を使っていません。スピノザはつねに「各人(unusquisque)」という言葉を使います。おそらく次のような理由です。デカルトのように「私」を主語にして語ってしまうと、存在の多様性を肯定することが難しくなると思います。「私」について認められることは万人にも認められるはずであるという論理が生まれてしまうからです。こうして「人間は・・・すべき」という答えが出てきます。実際、デカルトは『方法序説』を次のように書き出しました。「良識はこの世で最も公平に配分されているものである」(Descartes 1996:1)。「私」

がもっている「良識」はすべての「人間」がもっているはずだというわけです*。スピノザはこのような論理を認めなかったと思います。だからたんなる「各人」という言葉を使っているのだと思います*。スピノザが明らかに違う答えを出そうとしていることをこういう用語法に見て取ることができます。

そこでスピノザの答えについて考えてみたいわけですが、その前に「人間」を主語にした答えのいったいどこが問題なのかを確認しておきます。問題になるのは次の点です。「人間は・・・すべきである」という答えは道徳規範として与えられます。規範というのは各人の欲望を超越した規則ですね。それは有無をいわせぬ命令です。それゆえ、道徳規範に則って生きることは、そのような生を強制されることにほかならない。こんな答えをみんな本当に望んでいるのでしょうか。そうではないはずです。そこでスピノザの哲学が意味をもちます。

* まったく同じ論理をサルトルが主張しています。「こうして私は私自身に対し、そして万人に対して責任を負い、私の選ぶある人間像を作り上げる。私を選ぶことによって私は人間を選ぶのである」(Sartre 1963:33)。デカルトからサルトルにまで続く「意識」の哲学の系譜です。

* スピノザのような考えはドゥルーズ・ガタリの「器官なき身体」という概念に認めることができます。「身体」という生の基盤を「私の身体」と呼んでしまうと、生の多様性が肯定できない。だから「ある身体 (un corps)」(Deleuze & Guattari 1980, 203)といわなければならないということです。

1 完全性

はじめに、道徳規範に則って自分の生を生きる場合の論理を明確にしておく必要があります。それは以下のように表現できます。

大前提…人間は・・・すべきである。

小前提…ところでこの存在は人間である。

結論…したがってこの存在は・・・すべきである。

三段論法です。大前提が道徳規範ですね。その主語として「人間」が出てきます。そして小前提で「この存在」が「人間」であることを認めると、結論は命令になります。一見するともっともな論理ですが、よく考えるとそうでもありませんね。少なくとも、スピノザはこの論理を認めていなかったと思います。『エチカ』第四部の序文のテキストにその点を読みとることができます。ですから、そこから入っていきましょう。問題の焦点は、「人間」という主語がいったいどこから出てくるかという点にあります。始めから順番に考えてみると、「よく生きたい」という欲望が倫理学にその答えを求めているわけですが、「よく生きたい」ということ自体、今までの自分がよく生きていない、完全ではないと思っっている証拠であると思います。ですから「よく生きたい」という願望には「完全」な生というものへの欲望が含まれていると考えられます。ここには別に問題にするようなところはないように見えます。ところがスピノザはここに決して見過ごすことのできない誤りの温床を認めています。問題は「完全性」という言葉です。「よく生きていない」ということは「完

全ではない」ということと本当に同じことなのか。この言い換えは正しいのでしょうか。スピノザはこれが誤りと主張しています。では、いったいどこが誤っているのでしょうか。スピノザがこの言葉について述べていることを、少し補いながら整理してみるとだいたい次のようになります。

(1) たとえば、家を建てているとき、まだ窓がついていないとか、内装がされていないとか、そういう状態の家は「未完成」であるといわれます。つまり「完成」していないわけですね。

(2) ここから何が分かるかといえば、「家」という言葉でわれわれが思い浮かべるのはその完成型であるということです。これはあらゆる概念についていえることです。概念があらわすのはその事物の完成型だということです。

(3) 目の前にある建築中の家が「未完成」であるといえるのは、われわれが「家」の概念を持っているからだということがこれではつきりしますね。ちなみに、「家」という例はスピノザ自身が使っているものです。

(4) 概念というものにはじつは規範が含まれているということが以上から指摘できます。「家」の概念には「家とはかくあるべきで、そうでなければ家とはいえない」という規範が含まれているわけです。だから窓のついていない家はまだ「未完成」で、はやく「完成」させなければならぬ、ということになります。

だいたい以上のような論理です。キーワードは「完成」ですが、『エチカ』はラテン語で書かれていますので、原文では perfectus です。これは perfectus という動詞の完了分詞で、もともとの意味は「完成した」ということです。ところが、ここから転じてこの言葉は「完全」である

という意味をもつことになります。英語の perfect はそういう意味ですね。しかしラテン語もそうです。この言葉は17世紀の哲学では「完全」という方の意味で頻繁に使用されています。

このように、「完全」「不完全」という言葉の意味はもともと「完成」「未完成」ということなので、「家」のような人工物について使用される場合は間違っていないわけです。ところが、この言葉が人間を含めた自然物に対しても使用されるとすれば、いったいどういう意味で使用されているのでしょうか。この言葉が人工物について使用されている場合と同じ意味で使用されるとスピノザは指摘しています。「様々な自然物、つまり人間の手によって作られたのではないものをも、完全であるとか不完全であるとか一般に呼んでいることに別の理由があるようには見えない」(Eth. IV. Praef.)。

つまり、現実に存在する人間が「不完全」であるという場合には、建築中の家が「未完成」であるという場合と同様に、完成型としての「人間」の概念を思い浮かべ、現実に存在する人間の状態をそれと照合して判断しているわけです。ですから「人間」の概念には「人間とはかくあるべきで、そうでなければ人間とはいえない」という規範が含まれていることになります。

では、ここからどんなことが認識できるのでしょうか。この点はスピノザが詳しく述べているわけではないので敷衍してみます。おそらく次のようなことになると思います。「よく生きたい」という欲望は別に間違っていない。今までの自分がよく生きていないという感覚もやはり間違っていない。だからこれからどうすべきなのかという問いかけにも意味があります。ところが、「まだよく生きていない」という感覚を「不

完全」と言い直してしまうと、「人間」という概念が規範として求められてしまいます。「いかに生きるべきか」という問いかけに「人間は……すべき」という形で答えが与えられるのはこのためです。

しかし、このような答え方には重大な問題があります。なぜなら人間は家のような人工物とは違って一定の目的のために作られたものではありませんから、本来は人間の概念（完成型）など考えられないはずだからです。スピノザもそのように述べています。人間には完全も不完全もない、と。ですからそれをあえて考えようとすると、その内容はきわめて曖昧かつ恣意的なものになってしまいうでしょう。「私」について認められることは万人についても認められるはずだという、あまり根拠のない論理に頼らざるをえなくなってしまうからです。そういう概念にもとづいて「この存在は……すべきである」という答えを出してみたところで、「各人」が生きている現実の生とは何の関係もないたんなる命令になってしまいうわけです。求められていたのはこういう命令などではないはずです。では「いかに生きるべきか」という問いかけに対していたいどんなふうに応えればよいでしょうか。『エチカ』にはそれが示されていると思います。

2 人間本性の型

スピノザが眼中に置いたのは個物という存在だけです。スピノザはそれを「様態」と呼んでいます。スピノザは人間の本性を規定しようとしませんでした。個物の本性については明確に書いているのもこの理由からです。「各々の事物が自己の存在に固執しようとするコナトゥスが

その事物の現実的本質にはかならない」(Eth.III.7Pr.)。そして生の原則として「各人は自己の利益を求めるべきである」(Eth.IV.18Sch.)と述べています。主語は「各人」であって「私」ではありません。また、「人間」というような漠然としたものではなおさらありません。「人間」を主語にしないからスピノザの提案することは規範的な意味にはならないという点が重要ですね。スピノザの倫理思想はこの立場から語られていると思います。

ところが、『エチカ』第四部の序文を読み進めると、スピノザは「人間本性の型」について語り始めます。これはある種の「人間」の概念です。しかも、現実存在する各々の人間の完全性をこの概念を基準にして判断することができると言い出すわけです。実際、スピノザは次のように書いています。

「それゆえ私は以下において、善とはわれわれが提案する人間本性の型にわれわれがますます近づく手段になることをわれわれが確実に知るもの」と解するであろう。また反対に、悪とはわれわれがこの型を思い起こすのを妨げることをわれわれが確実に知るもの」と解するであろう。さらに、人間がこの型により多くあるいはより少なく近づくにしたがって、人間をより完全あるいは不完全というであろう」(Eth.IV. Praef.)。

ここでスピノザの意図がまったく分からなくなります。自分がたった今攻撃していた思考法を自分自身で語り始めているように見えるからです。そこで解釈が必要になります。スピノザのいう「人間本性の型」とはいったい何のことなのか。これから試みる解釈では、これが一種の「人間」の概念であることを認めます。その上で、スピノザが提案する「人

「間」の概念には規範的な意味が含まれていないことを示したいと思います。続いて、「人間」の概念を基準にして現実に存在する各々の人間の完全性を判断するということが何を意味するかを考えてみます。スピノザは明らかに現実に存在する人間の生を評価しようとしています。しかし、それは命令や強制を伴わない評価であるということを示したいと思っています。以上の二点を示すことよって、スピノザの『エチカ』が「いかに生きるべきか」という問いかけに対してどんなふうに応えようとしているかを考えてみたいと思います。

3 自由な人間

倫理的な判断の基準は、「人間」にとつてではなく現実に存在する各々の存在にとつて有益であるかどうかでなければならぬ。スピノザはこの意味で「自己」といつています。現実に存在する各々の存在それ自身ということであつて、けつして「私」ということではありません。すでに確認しておいたように、これがスピノザの原則です。したがつて、スピノザにおいては「自己」にとつて有益なものだけが「善」であり、またそのようなものを追求することが「徳」であるということになります。徹底的な唯名論です。この点から『エチカ』第四部の定理19から定理22を見ておきたいと思ひます。

定理19はこう断言します。「各人は自己の本性の法則にしたがつて、必然的に自己が善と判断するものを欲求し、悪と判断するものを避ける」(Eth.IV.19Pr.)。読まれるとおりです。各人は自己にとつての善を欲求し、自己にとつての悪を避けるというわけです。この点を踏まえ、定理

20では人間が「自己に有益なもの」を追求すればするだけその人間に「徳」が認められ、逆にそれを怠るとき「無力」とあるといわれるということが証明されます(Eth.IV.20Pr.)。さらに定理21では「生きる」ことを欲望することなしに「よく生きる」ことなど欲望しえないということが証明されます(Eth.IV.21Pr.)。これらをまとめる形で、定理22は「いかなる徳もこれ(すなわち自己)保存のコナトゥス」より先に概念されることができない」(Eth.IV.22Pr.)となつています。したがつて、「自己保存のコナトゥスは徳の第一にして唯一の基礎である」(Eth.IV.22Cor.)。

このように、スピノザにおいて問題になつてゐるのは自己の存在以外のものではないですね。それを維持することだけが「徳」なのであつて、何かそれよりも重要なものがあるわけではない。「誰も他のもののため自己の存在を維持しようとはしない」(Eth.IV.25Pr.)とスピノザは念を押しています。定理22では「コナトゥス」と呼ばれますが、自己の生を生きる欲望だけが問題とされているわけです。「いかに生きるべきか」という問いかけはこの欲望から発せられる問いかけとして理解されなければならぬ。

この延長線上に、後で「自由な人間」(Eth.IV.67Pr.)と呼ばれることになる人間のライフスタイルが描かれるというのが『エチカ』第四部の大まかな構成です。「自由な人間」とは『エチカ』第四部の序文に出てきた「人間本性の型」のことです。では「自由な人間」とは何でしょうか。「自由」という言葉の意味は『エチカ』第一部で定義されていいます。「自己の本性の必然性のみによつて存在し、自己のみによつて行動に決定されるものは自由であるといわれる」(Eth.IV.7D.)。こつう意味

で「自由」なのは、スピノザの哲学では「神」だけです。人間に対してはこの言葉は使えないわけです。『エチカ』第四部はもちろんこの点を前提しています。実際、次の定理が置かれています。「人間が自然の一部でないということ、また人間が自己の本性のみによって考えられ、自己がその十全な原因であるような変化以外は何の変化も被らないということは、起こりえないことである」(Eth.IV.4Pr.)。

それなら「自由な人間」とは何なのでしょう。「自由」という言葉を厳密な意味で使用すれば、「自由な人間」が現実にはほとんど存在することのできない人間であることは明らかです。その意味でたんなる概念です。では、この概念はいつたいどうやって作り出されたのでしょうか。「自由な人間」とは「理性のみによって導かれる人間」(Eth.IV.68.Dem.)と定義されています。人間は「自己の本性の法則」(Eth.IV.19.Pr.)にしたがって善と悪を判断するという定理にはすでに言及しましたが、「理性」と「本性」はここでは同義です(Eth.IV.24.Dem.)。ですから「自由な人間」とは「自己の本性の法則」のみにしたがって生きる人間です。現実には存在する人間もやはり「自己の本性の法則」にしたがっているわけですが、そのみにしたがつていてるのではないという意味です。この点から「自由な人間」という概念が理解できます。それは現実には存在する人間と同じ欲望によって生きる人間として構想されています。現実には存在する人間と同じ条件を課せられながら「自己の本性の法則」のみにしたがって欲望することのできる人間です。ですから各々の人間は「自由な人間」のなかに自分の欲望を理想的な形で認識できるわけです。おそらくこれがスピノザの意図したことです。

現実には存在する人間に課せられた条件はそれが身体をもっているとい

う点にあります。身体に対して外部から多くの力が作用するので「自己の本性の法則」のみにしたがつて欲望するわけにはいけません。では「自由な人間」は身体をもたない存在なのでしょう。そうではありません。「自由な人間」も身体をもっていると考えられます。しかもそれはミシエル・フーコーのいう「ユートピア的身体」^{***}のようなものではなく、誰もがもっているところの普通の身体です。ただし、「自由な人間」は外部から身体に作用する力をコントロールする技術を駆使することによって「自己の本性の法則」のみにしたがつて生きることができると。この意味で「自由な人間」とは「さわめて多くのことに対して有能な身体をもつ者」(Eth.V.39.Pr.)です。このように解釈すれば、各人の欲望を超越する外在的な規範ではなく、むしろ各人の欲望に内在する理想であると考えられます^{****}。ですからスピノザの「人間の」概念は命令しないわけですね。命令されて自己の欲望にしたがう人間はいませんから。「自^{***}フーコーによれば、「ユートピア」の空想は現実の身体の否定によってもたらされる。「ユートピア」では「身体が光と同じ速度で移動する」「望んだときに透明人間になる」(Foucault 2015, 1249)。

^{****}『エチカ』第四部の序文はあまり解釈の対象にならないテキストです。今のところ最も詳細な読解はビエール・マシユレによるものです(Macheley 1997)。マシユレの解釈には私も同意しますが、一点だけ食い違うことがあります。マシユレによれば「自由な人間」の生は現実には存在する各々の人間の欲望の「延長線上」(Macheley 1997, 22)に構成されるものです。だからそれは一種の「理想」(Macheley 1997, 23)です。この二点には完全に同意できます。しかしこの理想が「超越的な理想」(Macheley 1997, 23)であるという点には同意できません。以下に考察されるように、「内在的な理想」として考察しなければこの概念の機能は十分に理解できないからです。

由な人間」の生きる生とは「いかに生きるべきか」とみずからに問いかける各々の人間が「このように生きたい」と感じる生なのです。ただし、この理想は容易に実現することのできないものです。現実的にはほとんど実現不可能であるとさえ考えられます。しかし、それでかまわないわけです。むしろ、「自由な人間」の生を実現可能な範囲に設定してしまふと、それは現実に生きている人間に対して命令し始めてしまいます。実現可能なことを実現していないということになれば、それは明らかに落ち度ですから、道徳的な叱責は免れませんね。この点をスピノザは明瞭に理解していたと思います。しかしそれならスピノザはいつたいどうして「自由な人間」を基準にして現実に存在する人間の生を評価しようとしたのでしょうか。「完全」とか「不完全」とかいうのはスピノザにとつていったいどんな意味だったのでしょうか。

4 自己のテクノロジー

『エチカ』第四部の序文のなかで、「不完全」ということは本来あるべきものが欠けているという意味ではないと、スピノザは注意しています。本来あるべきものが欠けているということがいえるのは、現実に存在する人間を規範的な「人間」の概念を基準にして評価する場合だけです。しかし、規範的な「人間」の概念の内容はきわめて曖昧かつ恣意的なものです。すなわち、人間に帰属する様々な性質のなかで、「私」を含めた多くの人間が持っていると思われる性質が何の基準もなしにただ表象されているだけです。ですから、あるべきものが欠けているといつても、そういう性質をたまたまもっていないということにすぎませんね。各々

の人間の存在だけを眼中に置く場合には欠如など存在するわけがありません。したがって、「不完全」な人間など存在しない。むしろ、各々の人間はそれぞれ「完全」であるといえます。これがスピノザの基本的な考えです。というのも、『エチカ』第二部の定義で「完全性」と「実在性」は同じ意味であるとされているからです。「実在性および完全性を私は同じものと解する」(Eth.II.6D)。

ところが、現実に存在する人間にはひとつの条件が課されています。自分自身の生を自分の欲望にのみしたがって生きることができないという条件です。というのは、スピノザによれば人間が何かを欲望するということは力を行使することですが、各々の人間の単独の力は非常に小さいものであり、その外部に存在する力によってつねに制限されていると考えられるからです。「人間が現実存在することに固執する力は制限されており、外部の原因の力によって無限に凌駕される」(Eth.IV.3Pr)。
人間は「自然の一部分である」(Eth.IV.4Pr)という形而上学がこのような認識の前提になっています。

ところで、自分の欲望にのみしたがうということは自己の利益を求めるということです。すると、欲望に関する上のような認識は次のことを意味しています。すなわち、人間は自己の利益を求めて生きることができないということです。少なくとも真の利益を求めることは非常に難しいことであると考えなければなりません。人間は自分にとつて真の利益が何であるかを十分に認識できないまま自分の生を生きているというわけです。『エチカ』によれば、これが人間の生の現実です。今までの自分がよく生きていないという感覚はここに由来するものだと考えることができます。この現実から一歩踏み出すには、まずこの感覚を自

分に対してはつきりさせなければならぬ。そのためには、やはり何かの基準が必要だ。それが「自由な人間」だと思えます。それは各々の人間が自分の欲望にのみにしたがったら、どんなふうにかつ生きることができると示すものです。ですから「自由な人間」とは自己にとって真の利益が何であるかを知っていて、それにしたがって生きる人間のことであります。「絶対的に徳によって活動することは、我々においては、理性の導きによって活動し、生き、自己の存在を維持する」(Eth.IV.24.Pr.)ことであるといわれていますが、この定理は「自由な人間」について述べているわけです。

このように考えれば、スピノザがどうして「自由な人間」を基準にして現実存在する人間の生を評価しようとしたのかという問いかけには次のように答えることができるはずだ。問題は「より完全」とか「より不完全」とかという言葉の意味ですね。すでに引用したスピノザの説明によれば、「自由な人間」という「人間本性の型」に近づいているかどうかでその人間は「より完全」とか「より不完全」といわれます。それは自分の欲望が自分にとっての真の利益にどれほど近づいているかという認識です。この認識によって「よく生きたい」という欲望に鮮明な輪郭を与えることができるはずだ。スピノザのねらいもそこにあったと思えます。各々の人間の欲望に対して外在的な「人間」の規範との違いはここにあります。「よく生きたい」と思っている人間が「いかに生きるべきか」と問いかけているわけですが、規範を基準にして現実の生を評価することはただ欠点を指摘しているだけです。これでは答えになっていませんね。「よく生きたい」という欲望が無視されているからです。

善および悪についても同様のことが指摘できます。規範としての「人

間」の概念には、人間がなすべきことが含まれています。それが「善」ですね。その逆が「悪」でしょう。しかし、すでに述べたように「人間」の概念それ自体がきわめて曖昧かつ恣意的なものであり、ほとんど何の根拠もなしにただ表象されているだけのものです。つまり、「人間」の概念と同様に、善とか悪とかを規範として設定すること自体が現実存在する各々の人間にとっては意味のないものです。そういうものを個人に強制することは生の軽視でしかありません。

これに対するスピノザのスタンスは明瞭です。スピノザにとって善も悪もたんなる相対的な概念にすぎません。事実『エチカ』第四部の序文でスピノザはどのように主張しています。「善と悪に関していえば、それらもまたものがそれ自体において見られる限り、ものにおける積極的なものを何ら表示しておらず、思惟の様態であるにすぎない」(Eth.IV. Praef.)。スピノザのこのスタンスは『知性改善論』から一貫しています。「善と悪は相対的にのみいわれるものであって、それゆえ同じものが異なった関係にしたがって善といわれ、また悪といわれよう」(TIE. § 12)。では、善と悪が「相対的」であるとは何のことでしょうか。現実存在する各々の人間の状態に相対的なものであるということだ。すでに引用した『エチカ』第四部の序文が述べているのはじつこのことです。「善とはわれわれが提案する人間本性の型にわれわれがますます近づき手段になることをわれわれが確実に知るもの」として解するであろう。また反対に、悪とはわれわれがこの型を思い起こすのを妨げることがわれわれが確実に知るもの」として解するであろう」(Eth.IV. Praef.)。スピノザが言いたいことは明らかだと思えます。「自由な人間」の生を基準にして各々の人間の生を評価することによって、その人間の「欲望」の状

態が明確になります。自分の欲望をもっと追求するには何が真に役立つかということが、ここで明確に認識できるはずで、それが真の意味で善であるはずで、それは各々の人間の現実の欲望との関係でのみ「善」であるだけです。この点も『知性改善論』から一貫しています。「人間は自分の本性よりもはるかに強い何らかの人間本性を考え、同時にそのような本性を獲得することを妨げるものを何ら認めないので、この完全性へ自分を導く手段を求めるように駆られる。そしてそこに到達する手段となりうるものすべてが真の善と呼ばれる」(TIESSIG)。このように、「自由な人間」という内在的な理想を基準にして、現実の生を評価することによって、各々の人間にとっての真の「善」および真の「悪」が明確に認識できます。これらは各々の人間が「よく生きる」ために真に役立つ認識です。

さて、以上のような解釈によれば、スピノザの倫理思想は「人間」の概念をもとに個人の生を規制する思想に対する挑戦です。『エチカ』第四部の序文を注意深く読むことでこの点が理解できるはずで、「いかに生きるべきか」という問いかけに対して『エチカ』は個人の生に焦点を定めて答えようとしているわけです。その内容ですが、何らかの規範に則って各々の人間を行為させるといふ発想はスピノザにはまったくありません。むしろ各々の人間が自己の生を変えることを提案しています。スピノザはその著作を『エチカ』と名付けています。「倫理学」ということですね。しかしその中身はメタ倫理学でも規範倫理学でもない。スピノザが提案しているのはミシエル・フーコーのいう「自己のテクノロジー」のようなものです。

フーコーは「自己のテクノロジー」を次のように説明しています。「個々

人が自前の手段を用いるにせよ他人の助けを借りるにせよ、自己の身体、魂、思想、行動、存在様式に対する一定数の操作を実行することによって、幸福、浄化、知恵、完全性、不死、こういったものの何らかの状態に到達するために自己自身を変えることができるようにするもの」(Martin et al. eds.198:18)。驚くべきことに、「このなかには、すでに考察した『エチカ』の重要な主題が含まれています。

- (1) 個々人の生が問題である点。
- (2) 命令や強制によってではなく自己に操作を実行して自己自身を変えるという点。
- (3) 自己自身を変えるのは、何かより善きものに到達するためであるという点。

このような「自己のテクノロジー」の中心に位置づけられるのが、現実に存在する個々の人間の欲望の状態を内在的な理想によって評価するという考えです。そのなかで重要な役割を演じているのが「完全性」の概念だったわけです。

凡例

『知性改善論』(Tractatus de Intellectus Emendatione: TIE)の参照箇所は節番号を本文中に挿入する。

『エチカ』(Ethica: Eth.)の参照箇所は以下の略号を用いて本文中に挿入する。

序文: Praef. 定義: D. 定理: Pr. 証明: Dem. 系: Cor. 注解: Sch.

使用テキスト: Gebhardt(ed.) 1972, Spinoza Opera II, Heidelberg

文献

- ・ Deleuze, Gilles & Guattari, Felix 1980, *Mille Plateaux*, Minuit
- ・ Descartes 1996, *Discours de la Méthode*, Adam & Tannery(Eds) *Œuvres*VI, Vrin
- ・ Foucault, Michel 2015, "Le Corps Utopique," *Œuvre II*, Gallimard
- ・ Martin, Luther H., Gutman, Huck, Hutton, Patrick H.(Eds) 1988, *Technologies of the Self: A Seminar With Michel Foucault*, Tavistock Publications
- ・ Macheley, Pierre 1997, *Introduction à l'Éthique de Spinoza IV*, Vrin
- ・ Moore, G.E. 1996, *Principia Ethica revised edition*, Cambridge
- ・ Sartre, Jean-Paul 1996, *L'Existentialisme est un humanisme*, Folio, Gallimard